

◆「アレクサンドリアの聖カタリナ」とは誰か

出典は『黄金伝説』(166章)。舞台はエジプトのアレクサンドリア。キュプロスの王女カタリナは、才気溢れる若く美しい姫であった。時の皇帝マクセンティウス(帝位紀元310年頃)の目にとまり、求愛を受けるも、カタリナはキリスト教への信仰を理由にそれを拒絶する。皇帝は怒りのあまり数々の無理難題を課し、挙げ句の果てに拷問まで加えるが、彼女の堅い信心を崩すことはできない。姫を刑車に縛り付け八つ裂きにしようとしたが、主の御使いが現れ、車を木っ端みじんに打ち砕いてしまう。しかしながら、最後は振り下ろされた刃に首をはねられ命を落とし、その魂は天に召されていった。

この物語はキリスト教の逸話の中でも人気のあった主題の一つで、中世より多くの絵画に描かれた。その理由は第一にカタリナが女性信者の手本として、宗教心の高揚に効果的であったということ、第二に若く美しい女性が主人公であるため、男性が鑑賞する対象としても適していた、ということが挙げられよう。

◆聖カタリナ 過去の例から

先ほどの物語をふまえて、聖カタリナについての作例を見ていこう。クラナーハ(父)の場合、前景中央部に豪華な身なりの女性がひざまづき祈りを捧げている。背後に立つ男は一方の手で彼女の白い首をつかみ、もう一方の手で刀を握りしめている。これらのことからここに描かれているのは殉教を遂げるまさにその瞬間であることがわかる。ただ、同作では画面右に天の業火により砕け散る車輪まで描き込まれており、異なる時間が一つの画面に共存する「異時同図法」が用いられている。これは、鑑賞者を一つの瞬間に導き入れようとするよりも、物語全体を詳細に語ろうという画家の姿勢のあらわれである。

一方、ラファエロの例を見れば、カタリナの姿はクローズアップでとらえられ、彼女以外に人影は見えない。そのため、一見したところ、美しい女性がのどかな景色の中に立つ絵のように感じられる。しかし、子細に見れば、彼女の左手は木製の釘付きの車輪にそえられている。これは人物の属性を示す持物(アトリビュート)であり、この女性が聖カタリナであることを雄弁に主張している。これに気づくや、空からの光は聖なるものへと変わり、殉教の果てに天に召される場面を描いたものであることが暗示されるのである。



マゾリーノ・ダ・パニカーレ
《聖カタリナの殉教》
1428-30年



ルーカス・クラナーハ(父)
《聖カタリナの殉教》
1504-05年



ラファエロ・サンツィオ
《アレクサンドリアの聖カタリナ》
1508年